

# 語彙習得研究と認知言語学

森山 新

## 1. 語彙習得研究とその遅れ

言語というものを考えるとき、意味ほど重要なものはないであろう。Langacker (1991) は、「意味を考えずに文法単位を分析することは、ことばの意味を取り除いた辞書を作ることにように意味のないことである。」(p.1)として、意味は言語において重要なものであることを述べているし、国広 (1982) もその冒頭にて「言語研究の究極の目標は意味である。」(p.3)と語っている。にもかかわらず、意味に関する研究はつい最近に至るまで、言語研究全体の中で最も遅れたものになっていた(国広 1982: 3)。語彙研究との絡みで言えば、語彙に関する習得研究が遅れている(長友 1999)のも、何より意味に関する研究が遅れていることと決して無関係ではないであろう。

## 2. 語彙習得研究の遅れの原因

では何故に言語学における意味研究や、第二言語習得研究における語彙習得研究は、つい最近まであまり進展が見られなかったのでしょうか。

まず、第一に、意味現象が本質的には心理現象であり、客観的にとらえることが難しく、その結果、科学となることを目指していた 20 世紀前半から中盤の言語研究から取り残されることとなったのである。とりわけそれまでの観念主義的な言語研究の反動として生まれ、客観的データに基づいた科学的な研究を目指した、アメリカを中心とした「構造主義言語学」や、目に見えない心理的側面を研究対象から徹底的に排除し、目に見える行動的側面のみに研究対象を絞った「行動主義心理学」は、意味は心理現象であり客観性に乏しく、信頼に値しないとしたのである(その結果、Bloomfield は行動主義的な意味観を提示したが、それによれば「意味」とは心理的なものではなく、話し手がそれを発する場面およびその言語形式が聞き手に喚起する「反応」とであると定義している。詳しくは Bloomfield (1933: 139)

を参照)。

第二には、1950 年代にそれまでの構造主義言語学や行動主義心理学を鋭く批判する形で登場し、言語学や言語習得研究に多大な影響を及ぼした Chomsky の「生成文法」の考え方もまた、意味論を軽視したことを挙げることができる。彼の考えによれば、言語研究の中心は統語論であり、人間は生得的に「普遍文法 (UG)」という言語習得装置を持っているが、この制約を受けつつ獲得されるものは、統語 (文法) であり、これが「核文法 (core grammar)」となり、特定の言語の文法 (個別文法) が習得されていく。このプロセスの中で、意味 (語彙) は、生得的な「普遍文法」の制約に基づく導きを受けることができず、その結果、一つ一つ学習していかなければならないものであるとされた。また、統語 (文法) は規則的であり、科学的な研究の対象に値するが、意味 (語彙) は非規則的であり、とらえどころのないものとして、科学的な研究の対象から外れることが多かったのである。当時 Chomsky の考え方が言語習得に対して及ぼす影響が大きかっただけに、意味研究や語彙研究に及ぼす影響も大であったのである。

## 3. 認知言語学と語彙習得研究

これに対し、1960 年代に「生成文法 (当時は「標準理論」と呼ばれていた)」が統語論と意味論との関係に言及を始めて以来、統語論と意味論との関係をめぐり、意見の対立が表面化し、いわゆる「言語学戦争」<sup>1</sup>の時代へ突入する。それまでの生成文法の流れを踏襲し、意味論に対する統語論の優位や、統語論の自律性を主張するグループは、意味論として「解釈意味論」を打ち立てたのに対し、意味の重要性に気づいたグループはまず定められるべきは統語構造ではなく意味構造であると、生成意味論を打ち立て、意味論を言語研究の中心にすえていった。このグループは当時こそ生成文法を凌

駕する力を持つまでには至らなかったが、その後も Lakoff や Langacker などを中心として、意味論を中心とした研究が続けられ、認知心理学や脳神経科学などの知見なども取り入れつつ、近年生成文法の代案として、「認知意味論」や「認知文法」など、いわゆる「認知言語学」という新しい理論的パラダイムを提示している。このアプローチでは、後述するように意味の内部構造を明らかにしたり、多義語の意味のネットワーク構造を明らかにするなど、意味や語彙習得に対し、様々な示唆を提示しており、注目値する。

生成文法などの生得的アプローチでは、上述のように生得的に備わっている普遍文法とは統語的なものであると考えるため、統語（文法）的な言語知識の内容やその習得に関心が向けられ、それゆえ、意味や語彙の習得は軽視されることになった。しかし認知言語学のアプローチでは、生得的アプローチが主張する言語能力の「モジュール性」や「自律性」を否定し、言語は認知プロセスに基礎づけられ、認知と言語とは密接な関係があると考えられる。また、言語にとって最も大切なものは意味であり、意味とは、認知する主体としての人間が自らと環境世界との関わりの中から作り出す「概念(concept)」であると考えられる。そして以下に述べるように、「意味」の習得やそれが言語化された「語彙」の習得を重視している。

すなわち、認知主体としての人間は、環境世界に対し主体的に関わり、その結果、環境世界に対し主体的な「意味づけ」を行い、人間主体にとって同じ意味を持つものをひとまとまりにする形で「分節化」を行っていく。分節化により人間の脳内に形成されたカテゴリーには、認知主体としての人間の「身体性」が反映されるが、身体性はさまざまな制約を持っており、そうした制約はカテゴリー化にも反映される<sup>2</sup>。その結果カテゴリー内では、カテゴリーを構成する成員間の中で「プロトタイプ」を中心とした秩序や構造が生まれる。またカテゴリー相互の間では、「基本レベル」のカテゴリーを中心とした構造が生まれる<sup>3</sup>。こうした秩序（「プロトタイプ効果」と呼ばれる）が言語にそのまま反映し、語彙もまたプロトタイプや基本レベルを中心としたネットワーク構造が形成される。そのため語彙習得はこうしたプロトタイプ効果に沿った方向で行われることとなる。

具体的には、語彙の内部においては、プロトタイプ的な意味・用法から周辺的な意味・用法へ、拡張の方向に沿って習得が行われる。また語彙間においては、基本レベルのカテゴリーを中心として、一方では上位カテゴリーの方向へと進む抽象化（Langacker の認知文法では特にこれを「スキーマ化」という言葉で呼んでいる）に沿った習得が、もう一方では下位カテゴリーの方向へと進む「具体化」に沿った習得が進行していくと考える。

このように認知言語学では、言語を習得するプロセスにおいて重要なのは、語の意味を習得するプロセスであり、それは概念形成のプロセスであると考えられるために、意味や語彙の習得を何よりも重視しているのである。

また生成文法などの生得的アプローチでは、概して「規則的なもの」と「規則に従わないもの」、あるいは「規則 (rule)」と「目録 (list)」といった（誤った）二分法が用いられ（Langacker 1991: 261-265）、その下で語彙は、ややもすると「規則に従わない無法者」として、言語研究の舞台から追いやられることが多かった。しかし認知言語学のアプローチでは、言語の秩序性とは、何よりも人間の認知のはたらしに基づいた、カテゴリー化の秩序性が反映したものであると考えるため、カテゴリーの秩序性は、まず語彙（意味）の秩序性を生み、さらにそれが形式の秩序性をもたらしていくと考える。認知言語学は、語彙を牢獄から解放するのみならず、言語研究の主役として舞台の中央へと迎え入れることに大きく寄与したと言えるのである。

このように、認知と言語の相互関係を積極的に認め、認知の構造が言語の意味構造に反映することを明確に示すことにより、認知言語学のアプローチは、語彙習得研究に有意義な視点を提示することとなった。また認知言語学のアプローチは意味研究にも発展の道を切り開いた。例えばカテゴリー内部の意味構造に関する研究は、多義語の意味のネットワーク構造に対する研究に貢献し、さらにこうした研究は、日本語などの外国語教育に対して応用していくことが期待できる（これについては日本語教育の視点から複合動詞研究を概観した松田の論文（後掲）を参照）。

一方、認知と言語との関係を積極的に認め、言語や言語習得というものを、認知との関わりから見つめる認知言語学の立場は、語彙習得にまつわるさ

さまざまな学習ストラテジー研究に対しても、多くの示唆を与えうると考える（これについては学習形態や方略といった観点から語彙習得研究を概観した谷内の論文（後掲）を参照）。

#### 4. 今後の展望

本来、認知言語学は、言語運用や言語習得に対して、実際に脳内で展開されているプロセスを、できる限りありのままの形で記述し、それを説明することのできる理論的パラダイムの構築をめざしている。その点、現実からはかけ離れた理想的な言語環境を設定し、経済性や非余剰性など、理論的な簡潔性を追求しつつ、説明的妥当性のある理論構築をめざす、生成文法などの生得的アプローチの立場とは根本的に異なっている。

しかし認知言語学の歴史はまだまだ浅く、認知言語学的な観点からの実証的な言語研究、とりわけ第二言語習得に関する実証的研究は、生得的アプローチと比較しても、今まであまり多とはいえない（山梨（2001: 22）の注 14 を参照）。認知言語学が言語習得や外国語教育に対して、有効な視点を提示しうることが示すためには、今後それを裏づける実証的な研究の蓄積が必要であろう。

#### 注

1. 生成文法の「標準理論」では、統語論と意味論のインターフェイスは深層構造が担うとされていたが、量化現象などにおいてモデルの矛盾性が指摘されたことに端を発する理論対立。こうした生得的アプローチ内部の理論対立は、根本的には生成文法が意味論を軽視してきたことが原因となっていた。
2. 「身体性」とは、Lakoff（1987）、Johnson（1987）などにより提示された考えである。それまで人間の「心（mind）」は「身体（body）」と対立するものとされることが多かったが、心により生み出される概念には、人間の身体の問題が深く関わっているというのである。たとえば人間の身体が直接関わる経験は、人間の経験の中で最も基本的なものであるが、こうした直接的な経験は、概念体系において中核を形成するようになる。つまり経験の直接性が概念体系の中核度を決定するのである。その一方で、人間の身体が直接経験しない抽

象的なものは、直接経験したものを土台にしたメタファー（metaphor）という営みを通じて理解され、これらは概念体系の非中心部（周辺部）を形成するようになる。その結果、概念には中核的なもの（プロトタイプ）と周辺のなもの（非プロトタイプ）といった差別化が生じるようになるというのである。

3. カテゴリー間においては、それより上位のカテゴリーや下位のカテゴリーと結び付けられ「タクソノミー（taxonomy）」と呼ばれる階層構造（イヌを例に取れば「動物一哺乳類一イヌスビツツ」といった階層構造）を作る。この階層構造はそれぞれ対等な立場におかれているのではなく、あるレベル（上記の例ではイヌのレベル）のカテゴリーが他のカテゴリーに比べて優先的に想起されたり、習得されたりすることが知られている。それゆえこのレベルは「基本レベル（basic level）」と呼ばれている。

#### 参考文献

- 国広哲弥（1982）『意味論の方法』大修館書店  
郡司隆男・阿部泰明・白井賢一郎・坂原茂・松本裕治（1988）『岩波講座 言語の科学4 意味』岩波書店  
長友和彦（1999）「第二言語としての日本語の習得研究：概観、展望、本科学研究の位置づけ」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究平成8年度～平成10年度科学研究費補助金研究成果報告書 研究代表者 カッケンブッシュ・寛子』9-41。  
森山新（2001）『認知と第二言語習得』ソウル：図書出版啓明（日本では、東京：凡人社）  
山梨正明（2001）『認知言語学論考』ひつじ書房  
Bloomfield, L. (1933) *Language*, New York: Holt.  
Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago, IL: University of Chicago Press. (河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子訳 2001『構文文法論：英語構文への認知的アプローチ』 研究社出版)  
Johnson, M. (1987) *The body in the mind. The bodily basis of meaning, imagination and reason*. Chicago, IL: University of Chicago Press. (菅野盾樹・中村雅之訳 1991『心のなかの身体』 紀伊国屋書店)  
Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago, IL: University of Chicago Press. (池上誓作・河上誓作他訳 1993『認知意味論』紀伊国屋書店)  
Langacker, R. W. (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Bases of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.

（もりやま しん／お茶の水女子大学）